

嘘予告「至高の41人に  
SANSロールプレイヤー  
がいたら、よりによっ  
て100年後に来たら」

備忘録

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

思いつきで作った嘘予告です。

至高の41人にundertaleのSANSがいて、魔導国建国後に来ちゃった  
ら。

よりによって、アインズさまの所行を知ったら、よりによって、アルベドに先に出会って  
いたらという。

# 目次

嘘予告「至高の41人にSANSロール プレイヤーがいたら、よりによって10 0年後に来たら」	1
--	---



嘘予告「至高の41人にSANSロールプレイヤーがいたら、よりによつて100年後に来たら」

魔導国の王宮、光さす廊下に彼はいた。

100年ごとのおたのしみ。新たなぶれいやー。

「あー……ちよーつとだけ、やらかしたみたいだな」

大勢のしもべを付き従えた偉大なる魔王と、たった一人燃える瞳でそれを見るただのスケルトン。

きらびやかなローブと、薄汚れたフード。

「SANSさん、よかった。こつちに来てたんですね！papyrusさんは一緒じゃないんですか？」

この場にアルベドはいなかった。papyrusも。つまり、そういうことだ。

近寄るアインズをSANSは冷たい声色で拒絶した。

「オイラのことは、どうでもいい……それより、あんたのことだ。

オイラのスキル、知ってるよな？」

SANSのレアガチャ課金アイテム。そのフレーバーテキストを思い出したのが

今。

「罪の審判、ですか？俺は……」

犯した罪の感触が背骨を這い上がる。

「アンタ、よくわからずにおっかなびつくりやってただる？」

それで、気づいたときにはもう、おそすぎた……

なかがヒドいって、それがただの事実にはかすぎないってことだ。

うっかりで、国までつくるヤツがいるか？じょうだんキツイぜ」

SANSは笑みを浮かべ、肩をすくめる。

軽い調子で言っているが、その冷たい声は軽蔑と拒絶にあふれていた。

「返す言葉もないです……俺はもう、とつくに壊れているのかもしれないね」

これから先に何を言われるか聡明なオーバーロードは分かっていた。

だが、あえて彼は聞いた。これはまだ罰ですらないのだから。

「しかもアンタ、何人かはかくじつにわざと殺したな？」

漆黒の剣を殺された時、あんたはそれに怒る心が、あつたはずなのに。

いまのアンタと、あのステイレット使い、なにか違うところはあるのか？」

ここに至り、アイズは何度かの感情沈静を発動している。

それを見てSANSはため息をつく。

このソウルレス野郎  
心までなくしたのか?と。

「……俺には、守るものがあります。ギルドは守れなかった。

だけど、彼らが残したものは守りたいんです」

魔王は手でもべたちを下がらせ、彼らを守るように立ちはだかる。

「それで、嫌業種つてたやつらとおなじ事をするのか。

カルネ村を守っておきながら、リザードマンの村を焼くのは、どういうことだ?

それは、本当に必要なことだったのか?」

SANSの冷たい笑いは、内に燃える激しい怒りとその裏にある自分への無力感によく  
るものだ。

「違う!違うんだ、SANSさん!話を聞いてくれ!」

アインズの本性が狂気が、ゆがんだ愛着とその裏返しの怒りが怒声となって出てく  
る。

「……いい世界だよな。鳥は歌い、花は咲き誇る。

こんな世界であんたみたいなヤツは……」

一呼吸置いて、ケツイに青白く燃える片目。

「地獄の業火に焼かれるべきだ」

アインズは最悪の時をすごそうとしている!

4 嘘予告「至高の41人にSANSロールプレイヤーがいたら、よりによって100年  
たら」

「……SANSさん流に言うなら俺も決意を固めたんですよ。  
やるのなら容赦はできません。俺は倒れるわけにはいかない」